

おやつのかん3 -ちょっとひとやすみ-

—大切な栄養—

NO. 78



先日、ある保育園に伺ったときのこと。園庭で子ども達の様子を見ていると、小さな男の子が、私のそばに。保育園や幼稚園に伺えば珍しいことではないので、「おはよう」「今日はあったかいね」と声をかけ、他の子の遊びに目を移しました。ふと気が付くと、その子はまだ私のそばにいます。何か言いたのかなと思い顔を覗き込むと、視線は他の子の遊びに向いています。私は、その子に特に問いかけることなく、頭を撫でて本来見るべき場所に目を戻しました。すると今度は、私の足にしがみついてきました。その子の視線は他の子の遊びのままです。“なるほど、お友達が遊んでいるあそこに行きたいんだな”と思い、私の足にしがみついているその子を一度抱きしめてから、「ほら、行っておいで！」と声をかけると、「うん」と一言、お友達の下へ走り出しました。少し勇気が欲しかったのかな？ ガソリン補給していたのかな？ 輪に入ったその子に手を振ると、笑顔で手を振り返してきました。とても気持ちのよい5分間でした。

その大切さが語られる中、よいこととは思っていないながら、上手く説明できないのがスキンシップですね。子どもからあまりにもせがまれると、ちょっと離れたくなるものだし、こちらから求めても上手くいかないこともあるし。でも、ある瞬間、とても心地よく感じたり、安心したり。上手く説明できないけれど欠かせないものなんですよね。コロナ禍、人と人とが距離をとるようになり、誰もが、この大切な感覚(感触)を忘れかけているかもしれません。補給しなきゃです。

あんずの小さな子ども達の中には、スキンシップの感触をあまり好まない子がいます。じっとしてられない子は、身体を止められることへの抵抗感のほうが強くなってしまおうようですし、触れる感触そのものにデリケートな子もいたり、感じにくい子もいたり。逆に、ずっとお母さんにくっついていないと不安になってしまう子もいます。親子で通園していただく中で、子どもも大人も、程よいスキンシップを見つけてほしいなと思っています。誰でも、誰かとのコミュニケーションは、生まれてすぐに抱っこされた時に始まります。まさにスキンシップからですね。コミュニケーションの出発点でもあり、言葉を育てていくためのベースでもあります。また、飛び出していくために必要なパワーの源にもなります。その子にとって適度なスキンシップを見つけていきたいものです。

あんずでの親子遊びのように、スキンシップそのものを遊びやゲームにして楽しむ場面もありますし、何かをしている時に、肩に手を置いたり、足をさすったり。大人が椅子になって包み込むようにテレビを観ることだってスキンシップです。働きかけに応じながら一緒に着替えることや、むずかしい制作を手伝うことだってスキンシップです。「できた」「やった」のハイタッチもですね。子どもが小さいうちに、生活の中にたくさん散りばめておくと、少し大きくなってからの、人との向き合いに必ずや生きてきます。

学校に行くようになってくると、スキンシップも少しずつライトにしなければならなくなります。大きくなった身体で飛びこんで来られても支えられなくなりますし、子どもの年齢を尊重した振る舞いを身に付けていくこともテーマになり、心のスキンシップにも移り変わっていきます。



結局、人の中で過ごしていく上で、スキンシップはずっとずっと必要なんだってことですね。上手く生きていくために必要な栄養だって。書きながら納得しちゃいました。(R4. 11) K